

仲 修平 准教授 (専攻 社会階層論・計量社会学)

(1) 社会学とはどのような学問とお考えですか。

社会科学は社会の多様な事象を対象として、その実態と因果関係をより確かな根拠に基づいて解明する学問だと考えています。社会科学の一分野である社会学は、人びとの行為や関係を記述し、それらを説明する学問領域だと考えます。

研究を進めるためには、学問の発展にとってより意味のある「問い」を見つける必要があります。とはいえ、どのような「問い」が学問や人びとのためになるのかは容易に答えを出せない問題です。いかなる事象を研究対象とするのか、その対象をいかにして測るのか、そこからどのような知見を導き出すのかについては、予め答えが用意されているわけではありません。少なくとも、自分自身にとって探求することが興味深い現象から出発して、それを起点としてより広い学問の世界へと繋がることを目指したいと思っています。

日常と学問を結びつけるためには、「方法」が大切だと考えています。もちろん、個々人の問題関心が異なるために、社会学の研究対象は何でもありうると思います。けれども、その対象がどうなっているのか／なぜそのようなになっているのか、という問いに答えるためには、根拠となる資料を集めることやデータを分析することが必要となります。その方法の1つが私の担当科目でもある「社会統計学」です。

社会統計学がいつでも万能な方法であるとは思っていないのですが、「一定の型」があることによって思考をより深めることが可能になると考えています。少なくとも、その型を用いることによっ

て、より確かな方法で答えを出せる範囲における「問い」を見つけることができると思います。

型を知ったうえで型を破る。社会学の魅力はそこにあると考えています。自分自身にとっての「社会学の最前線」を一緒に探求してみませんか。

(2) 先生が専攻されている、あるいは、この大学で学生に教えられている社会学とはどのような学問ですか。

私の専門分野は社会階層研究です。社会階層とは、学歴・収入・財産などの社会的資源やその獲得機会が社会成員間に不平等に配分されている社会の状態を意味します。その状態に何らかの格差や不平等があるとすればどのように／なぜ生じているのかを明らかにしていく学問領域です。

社会の状態を調べる方法の1つに個々の人びとを対象として、働き方や暮らしの状況を把握する社会調査があります。例えば、日本全国に居住する20～40歳代を調査対象として、就業・結婚・家族・教育・意識・ライフスタイルなどの側面を2007年から現在に至るまで実施している調査があります（東大社研パネル調査）。この調査では、同一個人を長期的に追跡しているため、ある時点で生じている変化がなぜ生じたのかをより確かな情報に基づいて検討することが可能となっています。

私は社会階層研究の中でも、「働くこと」に焦点を当てる研究に取り組んでいます。このテーマにこだわってきたのは、私自身の職業経験と密接に結びついています。20歳代から30歳代は、民間企業に勤める会社員や企業から独立して働く個人事業主、無職や短期

的な契約に基づく働き方を繰り返してきました。それらの働き方を経験する中で感じてきた個人的な疑問を調べていくうちに社会階層研究と出会いました。私の担当する「社会階層論」や「仕事の社会学」では、「働くこと」に関する学問的な知識を共有しつつ、これからの働き方を考えていきます。

(3) 1～2年次で読んで欲しい本

- 1.井出英策・宇野重規・坂井豊貴・松沢裕作，『大人のための社会科—未来を語るために』（有斐閣，2017）
- 2.筒井淳也，『社会を知るためには』（筑摩書房，2020）
- 3.小熊英二，『日本社会のしくみ—雇用・教育・福祉の歴史社会学』（講談社，2019）
- 4.ハンス・ロスリング，オーラ・ロスリング，アンナ・ロスリング・ロンランド，上杉周作・関美和訳
『FACTFULNESS—10の思い込みを乗り越え，データを基に世界を正しく見る習慣』（日経BP社，2018=2019）
- 5.左右社編，『仕事本—わたしたちの緊急事態日記』（左右社，2020）

周囲の人たちとどうもうまく馴染めない。他者のことは考えてもわからないので，人と不必要に関わることは面倒である。場合によっては，ヘッドホンをしてスマホの画面に視線を落としてその場をやり過ごそう。そのように感じたことはありませんか。

一人ひとりの人間の生き方は異なるので，ある意味で当然と思います。もちろん，社会や他者との関わりを遠ざけるときのあっても良いと思います。けれども，社会学部に入学したみなさんに

は、「社会との向き合い方」を知るチャンスはたくさんあります。上記に示した著作は、「社会を知る」ということが思ったよりも楽しい営みであることを教えてくれます。

「1.」と「2.」は、「社会を知る」とは一体どういうことなのか、それを知ることによって私たちはどこへ進むことができそうなのかを考えるヒントが詰まっています。「3.」は、日本社会を対象として、働き方や暮らし方の背景には何があるのかをより長期的な視点から捉える枠組みを提供してくれます。「4.」は世界で生じていること（例えば、「社会的な分断」や「人口増加」の問題）をより確かなデータに基づいて考えることに気づかせてくれます。「5.」は、新型コロナウイルス感染症の拡大にともなって実際に働く人びとはどのような経験をしたのかを、具体的に知ることができます。ニュースや新聞だけではわからない仕事の世界に及ぼした影響がよりリアルに描かれています。これらを読むと、それ以前とは違った社会が見えてくるかもしれないと思います。

(4) 3～4年次で読んで欲しい本

1. エミール・デュルケーム，宮島喬訳『自殺論』（中央公論社，1985）
2. エミール・デュルケーム，田原音和訳『社会分業論』（筑摩書房，2017）
3. カール・マルクス，城塚登・田中吉六訳『経済学・哲学草稿』（岩波書店，1964）
4. マックス・ヴェーバー，清水幾太郎訳『社会学の根本概念』（岩波書店，1972）

5.ゲオルク・ジンメル，清水幾太郎訳『社会学の根本問題』
（岩波書店，1979）

6.尾高邦雄，『職業社会学』（岩波書店，1941）

* 刊行年は翻訳書が刊行された西暦です。

3～4年生には，社会学の「古典」を1冊でも良いので手にとつてほしいと思います（「1.」から「6.」）。私にとっての「古典」との出会い，学部生のときに『自殺論』を通読したことです。当時はおよそ理解できたとは思えないのですが，「社会学の古典をとにかく読んだ・・・」という妙な高揚感がありました。じっくり時間をかけて読み応えのある本と向き合う機会をぜひともつくって欲しいと思います。

「7.」から「11.」は学問の方法に関するものです。知識を生産するとはどういうことなのか（「7.」）から始まり，最先端のデジタル技術を用いてデータを集めることに至ります（「11.」）。それ以外としては，方法そのものを比較しながら検討する著作（「8.」）や社会学における方法論をより広い視野から捉える著作（「9.」と「10.」）となっています。研究を進めるために必要な方法を改めて考えさせてくれます。

7.梅棹忠夫，『知的生産の技術』（岩波書店，1969）

8.高根正昭，『創造の方法学』（講談社，1979）

9.佐藤俊樹，『社会学の方法—その歴史と構造』（ミネルヴァ書房，2011）

10.佐藤俊樹，『社会科学と因果分析－ウェーバーの方法論から知の現在へ』（岩波書店，2019）

11.マシュー・J・サルガニック，瀧川裕貴・常松淳・阪本拓人・大林真也訳『ビット・バイ・ビット－デジタル社会調査入門』（有斐閣，2017=2019）

(5) 先生の代表的な著書または論文を二つか三つ教えてください。

『岐路に立つ自営業－専門職の拡大と行方』（勁草書房，2018）

「日本における自営業の変遷－地域別にみる雇われない働き方の仕事環境」『日本政策金融公庫論集』（日本政策金融公庫総合研究所，2021）。

「自営業の衰退と再生－雇われない働き方をどう支えるか」櫻井純理編『どうする日本の労働政策－いま社会政策に何ができるか』（ミネルヴァ書房，2021）。
